

土井健司著

## 『司教と貧者—ニュッサのグレゴリオスの説教を読む』

(新教出版社 2007年)

### 打樋 啓史

本書は、4世紀の教父であるニュッサのグレゴリオスが残した説教の内、社会における救貧の問題を扱った三編、「施し」、「『これらの一人にしたことは私にしたこと』について」、「高利貸し駁論」の翻訳と注釈を主部として、それに序論、解説、資料集を加えてまとめられた研究書である。著者の土井健司氏が「序—教父を読む視点と本書の構成」で明確に示すように、本書は日本ではほとんど手が付けられてこなかった「社会的視点」による教父研究の試みとして著されている。従来、正統信仰の基準として重視されてきた教父たちの著作は、近代以降、より純粹に思想史的・文学史的研究の対象となっていくた。そのような流れの中で、特に近年英語圏において盛んなのがこの社会的視点からの教父研究である。著者が述べるとおり、この種の研究は従来の研究のように教理という面のみからではなく、社会的広がりの中で生きた教父の姿や思想を明らかにする可能性をもつものである。著者はこの視点から本書をまとめることによって、現代における教父理解の新たな可能性を開くことを目指そうとする。

最初の説教「施し」は、その日暮らしの物乞い、流浪者、病気で寝たきりの極貧者の救済を訴えるものである。グレゴリオスは、当時のローマ帝国において無数の移民や寄留者たちが野宿生活を強いられていたこと、その生活状況が実に悲惨なものであったことを生々しく描写し、この人々を助けることが火急の課題であることを力説する。グレゴリオスによれば、これらの貧者こそが救い主の顔をもつ者であり、神の国の門番なのである。

次の説教「『これらの一人にしたことは私にしたこと』について」の主題は、「エレファンティアシス」という病（今日のハンセン病）を患った貧者の救済である。グレゴリオスは、この人々が当時の社会においてどれほど疎外されていたかを描写し、「私は号泣しながらこの光景を見ました」（86頁）というように激情を吐露しつつ、群れをなして互いに支え合って生きるこの人々の苦悩を物語る。そして、同じ人間として言葉ではなく行為をもってこの人々を助けることの必要性が訴えられる。またこの病気について当時の医学を用いつつ説明がなされ、感染への恐れが否定される。グレゴリオスはこの貧者を支援することが容易ではないことを認めつつ、しかしそこに

土井健司著『司教と貧者－ニュッサのグレゴリオスの説教を読む』（打樋）

「いのちの道」があることを力説する。

最後に掲載された「高利貸し駁論」は、借金を背負い苦しむ農民や小売業者の救済を訴え、高利貸しの傲慢と非情を告発する論争的説教である。グレゴリオスは、当時高利貸しに追い詰められ自殺する人が少なくなかったことを述べ、高利貸しが人間愛の装いの下で実は人間憎悪の生を選んでいることを批判する。そして人間ではなくお金を愛する高利貸しが、その結果として終末の場で裁かれるであろうことを、その場面をリアルに描写しながら警告する。

各説教の注釈において、また第2部「解説」において、著者はこれらの説教に示されたグレゴリオスの救貧の思想を「人間愛」と「終末論」という2つの柱から明快に分析している。著者が何よりも注目するのは、3つの説教で救貧の対象となる具体的な貧者は様々であるが、いずれにおいてもグレゴリオスが「人間である限りに人間を愛する」という「人間愛（フィランソロピア）」の思想に基づき、貧者を同じ人間であると認めるよう聴衆に訴えているという点である。グレゴリオスは「同族者」、「同郷者」、「本性を共同する者」などの概念を用いつつこの点を強調し、同じ人間としての貧者への眼差しをもつこと、そこから貧者との関わりを築くことを重視する。このような人間愛に基づく他者への開放性こそがグレゴリオスの救貧思想の根幹をなすというのが著者の理解である。

さらに著者は、グレゴリオスが3つの説教で一貫して人間の自由選択（プロアイレシス）を重視しており、この問題が終末論的に展開されていることに着眼する。つまり、これらの救貧説教のいずれにおいても、終末の裁きや復活の場面が描かれ、そこから現在の生き方を見つめるという形で責任の倫理が問われているのである。著者は、「いかなる行為も、いかなる生も各人自身の選択の結果と捉えること」（68頁）をグレゴリオスの基本思想として位置づけ、グレゴリオスにおいて来世の報いとはあくまで個人の自由選択の結果、その生の結果として理解されていると論じる。グレゴリオスはそのような終末論的視点から、会衆が今ここで人間として人間を愛するという選択をなし、貧者との共同的生を築くように訴えたのである。

また、人間愛にも終末論にも関わる重要な点として、著者はグレゴリオスがこれらの説教で神学的・教理的主題を社会的次元において展開していることを何度かにわたって指摘する。「施し」においては、自然と人間の技術を創造した神こそが「施しの最初の発見者」であり、自分の持つ物を貧者に施すことはこの神を模倣することであると論じられる。著者はここで貧者への施しという社会的行為が「神化（テオポイエーシス）」という神学的主題と連結させられていることに注目する。また『『これらの一人にしたことは私にしたこと』について』において、グレゴリオスは神自身が卑小な人間に成るといふ仕方で人間に関わったのであるから、人間が同じ人間である貧者

と関わりをもつのは当然のことであると述べる。著者はこれを取り上げ、貧者への関わりを根拠として神の受肉が挙げられていることを重視する。

このように救貧という社会的問題が神化や受肉という神学的主題に基づいて論じられ、また逆にそれら神学的主題が社会的コンテクストにおける具体的な課題として展開されていることは、今日のキリスト教界にとっても極めて重要な視点を与えるものではないだろうか。グレゴリオスはキリスト教神秘思想に影響を与えた多くの霊的著作を著し、キリスト教修道制の発展に大きく貢献したことで知られる。しかし同時に、司教として地域の中で現実に病や貧困に苦しむ人々と出会い関わる実践家であり、その体験から切実な思いを会衆に訴えかけていったのである。つまりグレゴリオスにとって、霊的・内面的探求と他者との社会的連帯とは別々の事柄ではなく、むしろ神と共に歩む生において不可分のものであり、ここにグレゴリオスの思想の特色と意義を見出すことができるであろう。

率直な感想を述べれば、本書に訳された説教を読んでいる、教理の基礎を作った過去の偉大な思想家というよりも、現実社会に生きた生身の人間、一人のキリスト者としてのグレゴリオスの姿が生きいきと伝わってくることに驚かされ感銘を受けた。そして、グレゴリオスが直に語りかけてくるような臨場感の中で、その心から発せられた言葉が読み手の心に届き、いつしかグレゴリオスと対話するように説教を読む自分を発見する思いがした。これこそまさに、著者が社会的視点からの研究によって意図したことなのである。

これは語られた説教であることを意識して工夫された訳文にもよるが、著者の注釈の効果によるところが大きい。「序」において述べられるとおり、本書における説教注釈は学術的に厳密なものでありつつも、単に客観的で無機的な説明や論証に留まるものでなく、著者がテキストと取り組んだ結果としての「応答的注釈」となっている。つまり、本書では注釈そのものが著者とグレゴリオスのテキストとの対話の軌跡なのである。それゆえ注釈においては、グレゴリオスの用語、概念、表現などについて、聖書、キリスト教思想、ギリシア哲学などに基づく詳細で緻密な説明がなされると同時に、現代社会の諸問題や著者の日常的体験にも言及され、著者が説教を読解する中で紡ぎ出されてきた様々なことが率直に書き記されている。

このような注釈の方法は、土井氏のこれまでの教父研究に一貫して見られた姿勢、すなわち厳密なテキスト読解と精緻な文献研究を基礎としつつ、現代社会に生きる上での明確な問題意識をもって古代の文書と向き合う姿勢に基づくものであろう。この注釈を読むことを通して、読者は著者とテキストとの対話に引き込まれ、そこから読者もまた説教者グレゴリオスとの対話へと招かれる。著者はこの応答的注釈の「当否については、読者の判断を仰ぎたい」(22頁)としているが、評者はこの方法が上述

土井健司著『司教と貧者－ニュッサのグレゴリオスの説教を読む』（打樋）

の効果をもつ有意義なものであると評価したい。

なお、著者は「あとがき」において、なぜグレゴリオスが説教「『これらの一人にしたことは私にしたこと』について」で救済の対象とされる貧しい病者の病名（著者の結論では「エレファンティアシス」）を語らなかったのかと問い、この問題を否定神学との関連から考察することを今後の課題として挙げている。土井氏は本書以後この課題に着実に取り組んでおられ、学会発表などの場でその成果の報告を続けておられる。この問題についてまとめられたものを読む機会を楽しみにしつつ、また土井氏の社会的視点による教父研究のさらなる展開に期待しつつ、本稿を終えたい。